

さや 莢エンドウ



(10アール当り)

時期	方法	資材と施用法
地力作り	なるべく早い時期に(最低限、播種20日前迄に)投入し、深く耕す	<ul style="list-style-type: none"> ●ラクトバチルス600g →排水・通気がよく、保水もよい土に。 ●堆厩肥2トン以上(堆厩肥のC/N比に注意) ※2年以上の連作をする場合は、堆肥・ワラ・有機物等をシッカリ投入。 ●硫安40kg(複合肥料ならN成分6~8kg程度) ※播種時には無機チッソがあまり効いていない状態(土壌EC:0.2以下)が適切。微生物がチッソを有機化するために、早めに投入。 ※土壌が酸性(pH:5.5以下)の場合は、畑の大将<青>60kg程も同時に投入(更に整地時にも)。好適pH:6.2~6.5。酸性に弱い。特に土壌深層のpHも適正になるように注意。ただし土壌pHが6.7以上になる場合は 徒長や結莢悪化のおそれがある。施肥体系のどこかが狂っているので、全体的に見直しを。
ウネ立て時	整地時に全面散布して、ウネを作る(南北方向、高ウネ、適湿でマルチ)	<ul style="list-style-type: none"> ●畑の大将<青>60kg →このカルシウムは着莢を順調にし、栽培中のpH低下を防ぐ。 ●マンゾク粒状50kg →根の強化、根腐れ防止、連作の障害対策。
播種後	播種直後の灌水	●根っ酵素1ℓ程を希釈・灌水 →発根促進。以後、発芽まで乾かないように灌水。
誘引前	草丈8cm時、支柱立て、ネット張り、誘引...その前に	●根っ酵素1ℓ程を希釈・灌水 →根から生長促進。草丈5cm頃に灌水。(希釈倍率 500倍ほど) ※ツルの伸長と巻きヒゲの絡みを早く揃える事。立枯れ防止。
開花・結莢期の灌水施用(収穫前~始めの第1回追肥は液状が好適)	土が乾かないよう注意して灌水する。右記3種を、最初は4日間隔で順に使用(開花~収穫15日間に、液状で追肥)2巡目からは10日間隔で順に灌水	①花咲くCa液2ℓ 最初は開花始め前に。 →開花・受精を促進。(いわゆる生殖生長への切り換え)
		②根っ酵素2ℓ 最初は結莢開始後に。 →根の強化で肥大促進、下葉の枯れや根腐れの防止。
		③アミノ酸液2~5ℓ 最初は子実肥大期に。 チッソ等の栄養補給。絹莢(長さ7cm)は2ℓ、大莢(長さ10cm)は4ℓ
追肥(収穫中)(普通、第2回追肥と言われる)	※第1回追肥に液肥を使わない場合は、2回繰返す収穫開始後20日頃その後、収穫期間が延びれば毎月	併用 <ul style="list-style-type: none"> ●硫安20kg →豆と茎葉全体の生長を増進。NPKの複合肥料では 極端なpH低下、EC上昇になりやすい。 ●畑の大将<青>20kg →莢・実の充実と成熟を促進。土のpHを5.5以下には、決してしない事。ただし硫安とカルシウムを混ぜたまま時間をおかないよう注意。
収穫中の葉面散布による調節	基本的には3種交互に、7~14日間隔で葉面散布(状態により、どれかを連続散布)更に強く作用させるには灌水施用	<ul style="list-style-type: none"> ●根っ酵素500倍液を葉面散布 →根・生長の促進。根と茎の導管を強くし、根腐れ・風害・寒害・芯止り・枯上がり防止。 ●アミノ酸液500倍を葉面散布 →充実・子実の肥大。有機のチッソ作用で葉を厚く、豆を大きく、旨味のをせる。 ●花咲くCa液 500倍を葉面散布 →生育を引締め、病害対策。過繁茂・徒長を抑え、連続して花着き・結莢を良くする。 ※ウドンコ、灰色カビ、褐斑を出さない。 ※抗酸化成分(ビタミンC、E)を多くする。